ＮＴＩＤにおける英語のカリキュラム

松藤みどり（聴覚部一般教育等）

要旨：米国の英語教育は、日本では国語教育に相当するものである。聴覚障害学生の高等教育機関、ＮＴＩＤで行われている英語教育は、３つの分野で習熟度別に４段階の講座が設けられ、段階的に進んでゆくよう設計されている。このカリキュラム編成は、筑波技術短期大学における国語のみならず、外国語としての英語教育にも大変参考になるものである。

キーワード：ＮＴＩＤ、英語教育、カリキュラム、手話

１．はじめに

1998年３月、学生の研修旅行に伴って、再度NTIDを訪れる機会を得た。前回の1996年の訪問では、英語の授業にアメリカの手話を取り入れることを研究課題とし、英教育のベレント教授、手話学のフィッシャー教授、通訳養成のモニコウスキー教授と個別に面談し、日本における聴覚障害者の英語教育に応用できる有意義な示唆を得た[1]。今回の訪問では、英語部主任のオルダスリー教授と面談し、学生向けの履修案内の冊子と成績表をいただいた他、英語作文、英文講読、アメリカ手話、通訳養成の４っつの授業を参観させていただく機会があり、NTIDにおける語学教育について更に見聞を深めることができた。

NTIDの新しい英語のカリキュラムのシステムは、筑波技術短期大学、あるいは現在構想中の四年制大学における外国語並びに国語教育のカリキュラムを考える際におおいに参考になるものである。カリキュラムシステムを紹介すると共に、参観した授業の印象を記す。

２．芸術と科学センターの英語のプログラムの概要

２．１　ＮＴＩＤとＲＩＴ

NTID (National Technical Institute for the Deaf)は、連邦政府から資金援助を受けて運営されており、いわば国立の教育施設であるが、私立大学RIT (Rochester Institute of Technology) の７つのカレジの中の一つである。NTIDに在籍する学生は、通訳養成プログラムの学生を除けば皆、聴覚障害者である。RITの聴覚障害学生は①すべてのプログラムをNTIDで修了する。（多くの場合は学位を取得する）②NTIDに在籍しながらRIT のプログラムも受講して学位を取る　③RIT の学生としてのプログラムを修了し、学位を取得する の三つの可能性がある。

２．２　芸術と科学センター

NTIDの授業科目は主として、専門教育を扱う技術研究センターと、基礎教育を扱う芸術と科学センターで行われている。NTIDの前学部長、デカロ博士は1997年2月14日に筑波技術短期大学で行われた研究協議会で、NTIDの当時の新しい動きとして、芸術と科学センターのカリキュラムの改編と新しいラーニングセンターの開設の二つを挙げた。

芸術と科学の科目は、数学、科学、読み、書き、文学、文化の６科目であったが、カリキュラムの改編により、それぞれの科目に４つのレベルが設定され、学生は能力、技術、知識、理解において系統的に段々上に上がってゆけるように設計された。

デカロ博士によれば、NTIDでは13歳から14歳の学力水準にある学生にも対応しなければならないことが法律で定められているので、入学時点における学生の学力の差は大きい。二年で終了するコースをとるのがふさわしい学生もいれば、準学士コースに入り、RIT に編入して学士になる可能性のある学生もいる。これらの学生すべてに対応するには、学生の達成度に応じた授業を用意する必要がある。とりわけ読み書き能力に対する雇用者側の要求が大きいことも、カリキュラム改編に踏み切った大きな理由であるとのことだった。英語は芸術と科学の新しい６科目のうち、読解、作文、文学の３科目にまたがっている。

２．３　英語のカリキュラム構成

芸術と科学の中の新しい英語のカリキュラムは、1997年の秋に導入され、1996年４月以降に入学したすべての学生に適用されている。プログラムの目標は、RIT のリベラル・アーツのカレジ（文学部）における応用科学準学士と学士の学位取得にに要求される言語と文学、およびNTIDの三年コース(AOS: 職業準学士）と二年コース（ディプロマ）で求められている英語の読み書き能力を

養成するものである。

新しいカリキュラムの特色を次に述べる。

２．３．１　枠組み

新しい英語カリキュラムの中にはアカデミック・ライティング（作文）、ノンフィクション・リーデリング（読解）、文学の３つの科目がある。作文と読解には難易度に応じて導入、基礎、中級、上級の４レベルがあり、文学には基礎、中級、上級の３レベルの講座が用意されている。カリキュラムの中のそれぞれの講座は、４単位であり、週４回授業がある。NTIDの授業時間は５０分間である。

３つの構成科目の他に、導入レベルの２つの連続した「統合」科目があり、読み書きの基礎に重点が置かれている。

英語のカリキュラムの中の３つの構成科目は、芸術と科学センターの中の２つの部局が担当する。作文と読解は英語部が、文学は文化と創造的研究部が担当している。

２．３．２　学位取得と受講講座のレベルとの関連

AOS (Associate in Occupational Studies: 職業準学士) の学位取得を目標とする場合と、ディプロマを目標とするレベルでは、12単位を取得することが要件となる。ディプロマレベルの学生は、基礎で12単位必要である。AOSの学生は、中級で12単位が必要である。AAS(Associate in Applied Science: 応用科学準学士) の学位取得を目標にする学生は、RIT のリベラルアーツ・カレジで行われる英語の授業を取らなければならない。英語の学力が目標とする学位より低い学生は、要求されているレベルよりも低い講座から始めなければならない。

２．３．３　学生の講座位置づけと評価

個々の学生がどのレベルの講座に位置づくかは、SVP (新入生オリエンテーション) の期間、または学期の初めに行われる２種のテストの成績で決められる。講座が位置づけられたあとのカリキュラムの中での動きは、その講座の成績で決まる。(図　参照)

作文はNTID作文テストの得点で、読解と文学はNTIDの読解テストでの得点で決定される。それぞれのテストの内容は、次のとおりである。

a. NTID 作文テスト

学生の作文力を見るテストで、与えられた主題についての短いエッセイを30分間で書くものである。それぞれの作文を３人の教授が読んで、構成、内容、言語、語彙について評価する。得点は０点から100点になる。

このテストで40点未満の学生は、作文の導入講座に、40－49点の学生は、基礎講座に、50－59点の学生は、中級講座に、60－67の学生は、上級講座に位置づく。

68点以上の学生は、NTIDの英語プログラムの作文では「習熟している」とみなされ、これらの講座の受講を免除される。

b. NTID 読解テスト

学生の英語の読解力を見るテストで、読解と語彙について２時間で行われるものである。このテストは読解と文学の二つの科目の位置づけに用いられる。

このテストで80点未満の学生は、読解の導入講座と文学探究の講座に位置づけられる。80－97点の学生は、読解基礎と文学探究、98-124点の学生は、読解中級と文学分析、125-143点の学生は、読解上級と、主題と表象に位置づけられる。

144 点以上の学生は、NTIDの英語プログラムの読解と文学には「習熟している」とみなされ、これらのプログラムの講座は受講を免除される。

NTIDの作文テストの得点が39点以下で、NTIDの読解テストも79点以下の学生は、２学期間続けて、作文と読解を主とする読み書きの総合コースを受講する。

２．４　講座の内容

作文Ⅰ（導入）は、Ⅱに進むことを目標とした講座で、個人的な経験や資料から、さまざまな主題についての考えを発見したり、展開したり、組織立てたりする方策を学ぶ。物語、手続き、要約などのさまざまな形式での段落や本文の組織化や展開を習う。また、特定の読者を想定しての本文の推敲、編集、表現の技術も習う。ワードプロセッサーの技能習得も要求される。

作文Ⅱ（基礎）は、ディプロマ (二年終了コース) を取得するか、作文Ⅲに進むための講座で、個人的な経験や資料から、さまざまな主題についての考えを発見したり、展開したり、組織立てたりする方策を学ぶ。物語、記述、手続き、要約などのさまざまな形式での段落や本文の組織化や展開を習う。また、特定の読者を想定して本文の推敲、編集、表現の技術も習う。ワードプロセッサーの技能習得も要求される。

作文Ⅲ（中級）は、AOS(三年終了コース) の学位を取得するか、作文Ⅳに進むための講座で、様々な資料を集めて、記述、定義、手続きなどの様々な形式に本文を計画し、草案を書き、推敲し、編集する。様々な話題について、様々な目的や読者に応じた文の組織の仕方や展開の仕方を学ぶ。また、特定の読者を想定した推敲や編集や表現の技術を学ぶ。ワードプロセッサーの技能習得も要求される。

作文Ⅳ（上級）は、リベラルアーツのカレジ（RIT の教養部）の作文に進むために必要な作文技術を習い、練習するための橋渡しの役割をする講座である。様々な資料を集めて、要約、分類、比較、対比などの様々な形式

で文案を練り、草案を書き、推敲し、編集する。さまざまな話題について、さまざまな目的や読者に応じた文の組織の仕方や展開の仕方を学ぶ。また、特定の読者を想定した推敲や編集や表現の技術を学ぶ。ワードプロセッサーの技能習得も要求される。

読解Ⅰ（導入）は、NTIDで修了証書を取るためのコースを始めるのに必要な資料を読解する技能を習得するための講座である。

読解Ⅱ（基礎）は、NTIDでディプロマを取得するコースで成功するのに必要な資料を読解する技能を習得するための講座である。

読解Ⅲ（中級）は、NTIDでAOS(三年終了コース) を取得するコースで成功するのに必要な資料を読解する技能を習得するための講座である。

読解Ⅳ（上級）は、AAS(三年終了コース) を取得するコースで成功するのに必要な資料を読解する技能を習得するための講座である。

読み書き総合では、NTIDを修了する場合に必要とされる学術的な読み書きについて学習する。

文学の探究（導入、基礎）では、学生は演劇、詩、短編、短編小説、小説、小説の抄録などのさまざまな文学作品を紹介される。文学の基礎的な術語を習い、文学を味わうための批評的な読書力を高める。文学の探究と研究は、文学作品と自分の人生の関係について論じる刺激になることを想定している。

文学の分析（中級）は、すでに文学の基礎的な分析に馴染んでいて、伝統的な文学の要素について定義づけたり、明らかにしたり論じたりする用意のできている学生のための講座である。主題、個人の価値、葛藤、語調などの要素に焦点を当てた訓練と練習が行われる。更に、文学作品と自分自身の人生経験や自己同一性の発見の関連性ににについて論じる。

文学の主題と表象（上級）では、文学の分析を身につけた学生が、RIT のリベラルアーツに入る準備として、知識や能力を個々に文学作品の理解に応用できるようになることを目標とする。学生は個々の文学作品の分析、評論、研究のような活動の成果として、効果的な報告書を書く。さらに学生は文学で表現された多文化的な声や物の見方を考察する。

２．５　リベラル・アーツ・カレッジでの受講

AAS または学士の学位取得を目標とする学生は、RIT のリベラル・アーツにおける言語と文学の講座を終了することが要件とされている。このカリキュラムに入るには、まずリベラル・アーツ位置づけテスト(LATP:Liberal Arts Placement Test)を受ける。これは与えられた主題についての二時間のエッセイを書くテストである。LAPT の得点に基づいて、学生はリベラル・アーツ作文シリーズの三つの講座の一つに位置づけられる。それらは書記コミュニケーションⅠ、書記コミュニケーションⅡ、そして英作文である。

LAPTには現在のところ最低値がないので、不合格になることはない。しかしながら、LAPTの得点があまりにも低いと、学生はリベラル・アーツ作文シリーズに入る前にNTIDの英語プログラムの中の講座を追加で取ることが勧められる。

NTIDの学生がRIT の授業を受講するときには、通常は手話通訳がつく。NTIDにはこのための常勤の通訳が100 名いる。しかしながら、1998年12月に学長裁量経費「聴覚障害者高等教育の日米比較研究」プロジェクトの招聘で来学したスーザン・フィッシャー教授の話では、英語についてはNTIDを兼任しているRITの教授が指導し、通訳を介することはないとのことだった。

４．　参観した授業

研修旅行に同行した際に参観した授業の概略と印象を次に述べる。

４．１　アカデミック・ライティングⅢ

９時から９時50分までの授業を参観した。NTIDの授業は朝８時から始まるので、２時間目の授業ということになる。指導者は健聴のオブライエン博士。彼女はインディアナ聾学校で５年間教鞭を取ったあと、1968年のNTID開設と同時に教員となった。開設以来30年間勤めた８人の教授たちの１人で、唯一の女性である。

６名の学生の中には、帽子を被ったままの者、ガムを噛んでいるのか、始終口を動かしている者、飲み物をときどき口に運ぶ者など色々であったが、授業には集中し、質問にもよく答えていた。

先生の身振りも声も大きく、サインド・イングリッシュと思われる手話で発言内容を全て表現していた。扱った教材は野球観戦を題材にしたエッセイで、「段落」「主題」「展開計画」「トピックセンテンス」などのパラグラフの展開理論の概念を、色々な例を挙げて把握させていた。また、一つ一つの段落が、全体の文章の中で、どのような役割を果たし、相互にどのように係わっているかについても説明があった。筆者が大学１年のときの英語の授業で、外国人教師から習った内容によく似ていた。

日本の聾学校の国語と比較すると、扱われている教材は、中学部から高等部程度に見えた。日本にも起承転結という展開パターンがあるが、英語の文章展開はそれとは比較にならないほど論理的で緊密に構成されるので、「フォーマット」として指導できる点が、聾者には有利であると感じられた。

教材のテキストはＯＨＰでホワイトボードに映し出

し、必要なことはマーカーでホワイトボードやＯＨＰシートに記入するという、いわば古典的なやりかたで授業歯展開された。学生に「夏にコンピュータ技術を習って、もっと近代的な機器を使用したい」という話があった。おそらくラーニグセンターで指導を受けるのであろう。この古典的なやりかたはベテランの彼女には似合っているように思えた。

50分の授業時間は短く感じられたが、指導者側の発言が多く、生徒からの積極的な発言は比較的少なかった。あれだけ体を使い続ければ、指導者は相当なエネルギーを消費するだろうと思われるような、力強い授業であった。

４．２　ノンフィクション・リーディグⅡ

同日の午後１時から、ラーニングセンターのスマート・クラスルームで行われたもう一つの英語の授業を参観した。十数人の学生の中には、午前中に参観した授業を受講していた学生も一人いた。指導者は、クランドール博士。オブライエン博士よりかなり若い健聴の先生である。NTIDが発行している広報誌「FOCUS」の1998年春号にも彼女の授業風景が取り上げられている。[2)]

このスマート・クラスルームは、新しいラーニング・センターの一部で、壁に向かって配置された20台のコンピュータを備えた、マルチメディアを駆使できるNTID自慢の最新式の教室である。指導者の中央のコンピュータ画面をスクリーンに提示することはもちろん、それぞれの学生のコンピュータも切替え装置によって、簡単に中央の画面に映し出すことができるようになっている。

指導者は、使用する教材を授業展開の計画に従ってあらかじめコンピュータに取り込んでおき、その教室で簡単に提示することができる。また、学生が授業を休んだときでも、指導者が教材を、自分のホームページに発信していれば、ウェブ・ページを見て、授業内容や課題を知ることができるようになっているという説明があった。学生たちのみならず、日本にいるわれわれも、NTIDの教授たちのホームページにアクセスして、授業内容や発表論文の要約などが閲覧でき、大変参考になる。便利な時代になったものである。

学生の人数が多かったせいもあろうが、午前中の授業のほうが魅力的であり、学生の集中度も高かった。後で聞くと、午前中に機械のトラブルがあって、午後のこのデモンストレーションがうまくできるかどうか、そうとう緊張したそうである。新しい設備や機械を使いこなすにはある程度の時間が必要であることが感じられた。

４．３　ＡＳＬ

同日の午後３時から、ＡＳＬのクラスを参観した。指導者はバーバラ・ホルコム先生。トータル・コミュニケーションをもたらしたあのロイ・ホルコムの長男の配偶者だそうである。ここは５人の学生がおり、まったく音声なしの授業が行われた。「強い－弱い」などの対立する概念を絵で表現する課題が出され、学生が前に出て発表していた。指示もすべてＡＳＬでなされたが、動作が大きく、メリハリがあって、単語レベルの手話しか知らない私にもよくわかった。もっとも、頭の中では日本語に変換しながら手話を追いかけていたような気がする。このクラスの学生は皆、聾であった。

ＡＳＬは正式な科目として授業の中に位置づけられており、指導者とスタッフが８名もいる。筑波技術短期大学では手話が科目として学生に指導されるのはいつのことになるであろうか。道のりが遠く感じられた。

４．４　ＡＳＬの通訳

翌日の午前中にＡＳＬの通訳養成講座で、指文字と数の授業を参観した。この授業は健聴の学生を対象としており、指導者は聾のプリオット先生。音声は一切用いられず、学生たちも、ため息や笑い声以外の声を発することはなかった。学生は20名ほどで、遅れて入ってきた一人の学生を、先生自身の息子であると紹介してくれた。

電話番号や金額の読み取りのあと、歴史の年号や日付の読み取りがあった。欧米の歴史が主であったが、中に「1945年８月６日にヒロシマに原子爆弾が投下された。」という文があり、「広島はどう表しますか？」と手話で尋ねられたので手話で答えると、「なぜそう表すのですか？」と更に尋ねられ、答えに窮してしまった。

NTIDの通訳プログラムは、学校での通訳者の養成を主眼としている。聾者対象のゆったりした授業と比べると効率的で密度が高く、50分間にかなり頭を使う授業であった。ペアワークを採り入れたり、教材の準備も周到で、外国語の授業のようなアカデミックな雰囲気が感じられた。

５．　まとめ

筑波技術短期大学では、国語においても英語においても、能力別にクラスが編成され、段階的に内容が進んでゆくという形態はとっていない。英語については、高等学校の内容を身につけて入学する学生はわずかで、中には中学までの教科書しか履修しないで入学する学生もおり、しかも両者が各学科に分散している。学科単位で同じ授業内容をしようとすれば、どの学生の力も伸ばすことが難しい。NTIDに習って段階的なプログラムを順を追って履修できるようにカリキュラムを構成したいものである。

NTIDおよびRITでは外国語の履修は必修ではないが、希望すれば聾の学生でもRITの外国語の科目を履修することができる。その場合、フィッシャー教授の話では、NTIDを兼任しているnativeの先生が担当するので、教師自らが手話を用い、通訳を介して学ぶことにはならないということであった。外国語としての英語を日本人聾者に指導する際の参考になる話である。

英語と手話の授業を参観したが、ここではその二つが完全に切り離されていることを改めて強く認識させられた。

参考文献：

1）根本匡文：「聴覚障害者を対象とする日米大学kの教育実践－筑波技術短期大学と国立聾工科大学(NTID)」，pp.46-50

2）Frank A. Kruppenbacher, "Educational Technology for Lifelong Learning" Focus 1998 spring pp.4-7(1998),National Technical Institute for the Deaf / A Collge of Rochester Institute of Technology

新しい学生のための講座選択

	学術的作文講座 (academic writing course)				
NTID作文試験	履修免除 ６８以上	0883－261 作文Ⅳ ６０－６７	0883－211 作文Ⅲ ５０－５９	0883－161 作文Ⅱ ４０－４９	0883－101 作文Ⅰ ３９以下
	非創作読書講座 (nonfiction reading course)				
NTID読解試験	履修免除 144 以上	0883－260 読書Ⅳ 125－143	0883－210 読書Ⅲ 98－124	0883－160 読書Ⅱ 80－97	0883－100 読書Ⅰ 79以下
	文学講座 (literature course)				
	履修免除	0883－250 主題と表象	0883－200 文学分析	0883－150 文学探訪	
NTID読解試験	144 以上	125 －143	98－124	97以下	